

MOT コレクション

特集展示 横尾忠則—水のように 作品解説

《花嫁》1966

水、だしっぱなし！

あたり一面水びたしなのに、白目をむいて鼻をほじり、口も胸もあけっぴろげの花嫁。1966年の個展の出品作です。この展覧会に一文を寄せた三島由紀夫は「なんという無礼な芸術であろう、このエチケットのなさ！」と評しました。

1987年の横尾の日記には、「俗悪であること」、「最も過激な絵画を制作すること」、「人生全てを作品として提出する」と書かれています*。

*「横尾忠則展 満腹腹腹満腹」（横尾忠則現代美術館、2023）で展示。
「1987 April 19-20」 『横尾忠則日記人生 1982-1995』（マドラ出版、1995）に再録。

《シン・鏡の中の花嫁でさえも》2021/2022

花嫁のうしろ

鏡に向かって顔にカミソリをあてている花嫁。水びたしにはなっていませんが、相変わらず、あけすけな姿です。1966年に描かれた《花嫁》が反復・変奏されています。

洗面台の上、ふつうは鏡があるところには、マルセル・デュシャンの作品《彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも》があります。鏡に映って反転しているのか、あるいはガラスに描かれた作品なので、それを裏側から見ているのかもしれない。

裸にされた花嫁の背後からは、飛行機が迫ってきています。

《シン・香港ナイト》《シン・ジェームズ・ボンド》 《シン・未完への脱走》2021/2022

シン・老人のシン・作

作品名のあたみに、「シン」とついているものは、2022年に加筆されました。今回が初めての展示になります。

いずれも1966年の個展で発表された作品がもとになっています。2021年の個展のときには、アクリル絵具で描かれた作品を版画にして展示しました。これらの作品は、その版画に加筆したものです。過去の作品に、落書きのようなタッチを加えることで、一気に「シン」作になりました。ここにはいくつもの時間の層が重なっています。

《シン・落下する女3》2021/2022

落下する

作品のタイトルは、《シン・落下する女3》です。どこから落ちてきたのでしょうか。トラ柄の首吊り縄も、赤い丸の落書きも落ちてきたのかもしれませんが。

背後にある板戸のようなものは、マルセル・デュシャンの遺作《1. 落ちる水、2. 照明用ガス、が与えられたとせよ》からの引用のようです。

落ちる水=滝は、横尾の作品に溢れています。洋服の内側の青は水の色？

《A LA MAISON DE M.CIVEÇAWA（ガルメラ商会）》1965

「地上最強の文化的磁場」

60年代後半、横尾は、グラフィック・デザインをその活動の中心に据えながら、あらゆるメディアを表現の対象としていきます。三島由紀夫、細江英公、澁澤龍彦、土方巽、寺山修司、唐十郎、一柳慧、大島渚らとの交流から、「地上最強の文化的磁場」*が創られたと記しました。

横尾は、モダン・デザインが切り捨てた、卑俗なものや残酷なもの、私的で断片的な日常をあえて作品に取り入れることで、人の眼をとらえてはなさない、グロテスクで極彩色な世界を開きました。

*横尾忠則「地上最大の文化的磁場」『小説WOO』1986年1月号

《責場》1969

「御招待」

この3点組の作品は、1969年の第6回パリ青年ビエンナーレに出品され、版画部門のグランプリを受賞したものです。上下2点計6点の画像は、1枚の版、もしくは複数の版を重ねてできたものであり、ここにいわゆる完成形はありません。版画ができあがるプロセス自体を未完のまま見せています。

「御招待」に促され、強烈な色彩のなかを視線がさまよううちに、足先に惑わされてしまうでしょう。

《細江英公寫真作品 新輯版薔薇刑（集英社）》1971

涅槃像

『新輯版薔薇刑』は、細江英公が三島由紀夫を撮影した写真作品で、1971年に発行されました。横尾は、装幀と挿画を担当しています。新輯版では、新たに「海の目」の章が加えられ、三島の主題のひとつである海が、細江の写真と横尾のイラストレーションで展開されています。

三島は、このヒンズーの神々を配した自身の姿を「俺の涅槃像」と語り、横尾がインドに行くだろうと予告しました。

《サンタナ「ロータスの伝説」》1974年

「魂の兄弟」

横尾は、アメリカのラテン・ロック・バンド、サンタナの日本公演を収録したアルバム「ロータスの伝説」のジャケットをデザインしました。最多面数としてギネス世界記録に認定された22面体のジャケットには、神々やピラミッド、UFO、飛行機などが共存し、広大な宇宙空間に広がっています。横尾は、「至高なるもの」を求めているカルロス・サンタナとの出会いは運命的であったと記し、サンタナは横尾を「魂の兄弟」と呼びました。

《『聖シャンバラ』》1974

魂のふるさとへ

1970年、交通事故をきっかけに休業宣言をした横尾は、霊的な体験やUFOの夢、三島の死などにより、現実的なものへの関心を失い、宇宙や死後の世界など、魂がももいた世界・いずれは還っていく世界を求めようになります。なかでも興味を抱いたのが、地球内部の空洞に存在するというアガルタ王国にまつわる伝説で、その首都シャンバラに住む超人が地上にいる人々の意識を向上させるというものでした。この版画のシリーズは、そうした横尾の志向を示しています。

《FRANCIS PICABIA 1999-2000 (アプトインターナショナル)》1999、《戦後文化の軌跡 1945-1995 (目黒区美術館、朝日新聞社)》1995、《週刊少年マガジン (講談社)》1970、《[マッチ箱]》1966

「君のものは僕のもの、僕のもの僕のもの」

この言葉は、2009年に金沢21世紀美術館で開催された横尾の個展「未完の横尾忠則」の副題です。模写や引用、コラージュを制作の手法とする横尾の特質を見事に言い当てています。ある対象を模写したり、その対象に元々備わっている力を借りたりしながら、ポスターや雑誌の表紙といった器のなかに、あたかもフルーツポンチのように様々なイメージを盛り合わせていく。その選択と混合に横尾作品の面白さがあるのではないのでしょうか。

《すでに真理の探求はこの時から始まっていた》1991

ジャングルと滝

こちらは、アメリカの雑誌『Jungle Comics』の表紙がもとになっています。ターザンから派生した「KAANGA[カーンガ]」を主人公にした冒険物語です。

文字を見るとわかるように、もとの表紙の画像が反転して描かれています。そうして顔や服だけを残して透明になったところに、いくつもの滝が入り込んでいます。舞台がジャングルから滝の異界に移ってしまいました。

《集合と分散—その力の働き》1991

画家が描いているのは

この作品のもとになっているのは、スペインの画家ディエゴ・ベラスケスの《ラス・メニーナス》です。ベラスケスが描いているのは、画面のほぼ中央にある鏡に映る国王夫妻の肖像だとされています。

この作品で鏡に映っているのは、日光にある華厳の滝です。とすると、画家が描いているのは滝の絵でしょうか。横尾は、夢をきっかけに、滝の絵を1988年から集中的に描きました。

《龍の器》1988-1989

横尾の残酷な鏡の世界

この5点の連作は、イタリア・ルネサンスの詩人アリオストの叙事詩「狂えるオルランド」に登場する、ルッジェーロとアンジェリカの物語を展開したものです。海の怪獣に捕らわれた王女を武将が助け出すという物語が、ここでは、それぞれティラノザウルスやボンデー姿の女性、武者などに変えられています。

この作品は、いつもなにかに囚われていて自由のきかない苦しさや、そこから抜け出したいという願望を表しているのでしょうか。鏡の世界では、武者に頼らずとも逃げ出せる方法が見つかるかもしれません。

《Are You Ready for Reading the Book of Yoichiro Minami?》1992

子どものころのワクワク・ドキドキ

作品名にある、「the Book of Yoichiro Minami」とは、横尾が子どもの頃、夢中になって読んだ南洋一郎の文と鈴木御水の画による密林冒険小説『バルーバの冒険』です。和製ターザン「バルーバ」の仲間「片眼の黄金獅子」が画面上に描かれています。

青いシルエットになっているのは、宮本武蔵と佐々木小次郎の決闘場面です。5歳の横尾が講談社の絵本から熱心に模写したものがもとになっています。

光にきらめき流れ落ちる滝が、ワクワク・ドキドキする気持ちを高めているようです。

《300年の宴》1996

300年も夢のなか

1990年代半ば以降、横尾は、少年時代の体験や記憶に根差した冒険や異界を主題とした作品を数多く描いています。本作の浦島太郎の姿は、講談社の絵本を下敷きにしています。亀に乗った浦島太郎が竜宮城から玉手箱を抱えて地上に戻るところを潜水士が目撃しています。光に包まれたようなあたたかみのある色調で、時空をこえた海底のおとぎ話が描かれています。

《実験報告》1996

ふたつでひとつ

少年たちが目の前で繰り広げられる光景に見入っています。私たちも、少年たちに倣って見てみましょう。画面の手前で骸骨を集めている女性から画面奥の星まで、番号が付けられています。これは作家が描いた順番ですが、この洞窟を舞台に、お互い素知らぬ様子で、あちらこちらから集ってきたようです。見ると、ペアになっているものも多く、滝から流れ落ちた水も洞窟のなかでひとつひとつになっていきます。

《木花開耶媛の復活》1998

富士山の肖像

木花開耶媛（コノハナサクヤヒメ）とは富士山の祭神であり、その象徴である月と太陽が画面の左右に描かれています。ぐっと近づいて見てみると、ものすごい数の顔写真が貼り付けられています。富士山の発する凄まじいエネルギーに、たくさんの人が吸い寄せられているようです。この作品も、そうした富士山のパワーを受けて出来上がったのでしょう。

《彼岸へ》2000

あちらとこちら

この作品は、郷里の兵庫県西脇市で描かれました。新西脇駅近くの鉄橋にかかる線路の風景に、亡くなった同級生の肖像が浮かんでいます。赤い生者の横尾も見えます。彼岸花が添えられ、制作中に足元の床にとまっていた蛾が描き込まれています。死者の魂を表す蛾が画室にやってきたように、線路もあちらとこちらを繋いでいます。

《放たれた靈感》1991

受胎告知

この作品は、天使ガブリエルからマリアが聖霊によってキリ

ストを身ごもったことを告げられ、マリアがそれを受けるとい、受胎告知の主題がもとになっています。横尾は、天使から放たれた靈感が芸術家に宿り、作品となって生まれてくる、と考えました。

黄色く浮かんでいるのは UFO です。横尾が富士山の 5 合目で目撃したときの写真をもとに描かれました。UFO と天使は、横尾にとって、ともに異界からのメッセンジャーであるといえます。

《靈妙な得》2021

笑顔のふたり

この作品は、2021 年の個展の時に発表された「寒山拾得」のシリーズの 1 点です。寒山拾得は、中国唐代の 2 人の伝説的な僧です。寒山は通常、詩を記す巻物を持って描かれますが、ここではそれがトレットペーパーに代わっています。便器にまたがって遊んでいるような姿は、風狂で知られたふたりに相応しいものでしょう。

周りに浮かぶ赤いかたちは、筆痕を囲んで塗りつぶしたものです。思いがけないかたちがカンヴァスに現れたように、このふたりも便器に乗ってひょっこりやってきたかのようです。

《天地の愛》1994

ふたりの死

画面右下は、篠山紀信が撮影した写真集『男の死』をもとにした、三島由紀夫の姿です。左上は、『横尾忠則遺作集』に掲載された写真が下敷きになっています。『男の死』は、当初、横尾自身も被写体となる予定でしたが、横尾の原因不明の病により実現しませんでした。本作でようやくふたりの「男の死」がひとつの画面に表現されたとみることもできるでしょう。2022 年に出版された小説『原郷の森』にあるように、三島と横尾の交感、深く長く続いています。

《滝》1982

画家の再生

全裸で滝に打たれるピンクの男。両肩、へそ、股間、両膝、両足首では、滝の水が男の体に反応したかのように違う色になり、シンメトリックに放たれています。

1966 年の個展では、ピンクの女たちが水を背景に描かれました。本作は、画家になる決意のもとで作品を発表しはじめた 1982 年に制作されています。

滝行によって覚醒・再生するように、画家としての再スタートがきられた、と見ることもできるでしょう。

《暗夜光路 二つの闇》2001

どこにもない風景

「Y字路」は1本の道が左右2本に分かれてできたところを画面の中央に置いた風景画のシリーズです。

故郷の思い出の場所が、写真に撮って見たら、ただの夜のY字路だった。そうしたY字路との出会いから、このシリーズがはじまりました。

このどこかで見たことがあるような風景は、実際には異なる場所で撮影した写真を組み合わせてできた、どこにもないものなのです。

《20年目のピカソ》2001

ピカソとの出会いから

1980年、ニューヨーク近代美術館でピカソ展を見たことをきっかけに、横尾は画家になる決意をします。ピカソのように感情を正直に表現することや、遊びのなかにこそ人生や創造があると直観したのです。

正位置で描かれた滝と滝壺に対して、橋を渡る男の子と女の子は天地が逆転しています。画面に貼られた道祖神がこちらとあちら、この世とあの世の境界に立つように、作品のなかでは相対するふたつのものが結びつけられています。

《運命》1997

赤い宇宙

赤い闇に星雲とホタルの光が舞うなか、橋を渡る女の子と男の子。その道行を羽衣が守っています。女の子と男の子の下半身しか見えないのは、まだこの世に降り立ったばかりだからかもしれません。

《20年目のピカソ》で姿を現したふたりは、互いに寄り添って壊れそうな橋を進んでいきます。それは、子どもの感性を持ち続けたままであろうとする横尾の創作態度を思わせませす。

《暗夜光路 赤い闇から》2001

ふたつの世界

左の道にある墓地は赤く染まり、右の道には緑が生い茂っています。

一見すると、死の世界と生の世界に分かれているように見えますが、墓地の先には緑の明かりが灯り、木の根元は赤くなっています。交差するふたつの世界のなかで、赤い犬は、緑のほうに行くのでしょうか。

このY字路に描かれた赤の世界も緑の世界も、もとはひとつの道から来ています。

《ぼくはヘレン・ケラー女史と同じ6月27日に父の弟夫婦の間に生まれて、横尾家に養子として迎えられた。養父母はぼくを橋の下で拾ってきたと言った。小さい頃から星空を仰ぎながらぼくはぼくの運命についていつも空想していた。そして星のように点滅するホタルに自分を譬えた。見えない守護霊と子の年のネズミがぼくの長い航海の伴侶であることをぼくは知っている。》2001

緑の宇宙

長い作品名はそのまま横尾の自伝的要素を伝えています。蛍、ヒト、星雲。小さなものも巨大なものも共に生まれ、宙に舞うなかで、守護霊とネズミを前後に、両親に守られて幼子横尾の乗った小舟が漕ぎ出していきます。

「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」(ゴーギャン)という主題を横尾流の物語絵画にしたものと見ることもできるでしょう。

《意志の彷徨》2002

あっちにふらふら、こっちにふらふら

2002年に当館で開催した個展で発表された、「Y字路」シリーズの1点です。

道路に光が反射しているのは、雨に濡れているからでしょうか。横断歩道が天と地で相似形を成し、線路や道路のカーブが画面のなかをうねうねと流れています。

そのなかで、赤い街灯が、画面を飛び出して目の前に迫ってくるようです。

《TADANORI YOKOO》1965、《SELECTED POSTERS 116 (amus arts press)》2001

落下する男

このポスターは、1965年に開催されたグラフィック・デザイナーによる展覧会「ペルソナ」のために作られたものです。当時キャリアの浅かった横尾は、「ぼく自身のための広告」として、横断幕のような名前の下に、首を吊る自分の姿を描きました。

少し見方を変えてみましょう。作品集の出版を告知するポスターを見ると、空から落下傘で自作のポスター集が落ちてきています。横尾自身もどこか遠い星から、このロープですると地球に落ちてきたのかもしれない。そうして、作品を通じて、いろいろなメッセージを伝え続けているのではないのでしょうか。

執筆：藤井亜紀

© Museum of Contemporary Art Tokyo 2023